

終章 夜来 風雨の声

開元二十七年（七三五）年、夏の終わり。

「ここはどこか。かつて旅したところか。それとも我が家園か。」

一本の大木がある。この木を前から知るようであり、初めてのものである。青巖庵の四百年の松か、鹿門山の古木か。重なり合う無数の葉を見れば、旺盛な生命力が宿されているようだ。

数歩離れると、高い枝先に色とりどりの花がある。形も様々で、あるものは葵のようであり、あるものは牡丹のようであり、あるものは木蓮のようである。

その中の一つの花は、色は何であろうか、形はどう形容するのか、目にくつきりと見えているのに、色も形も実のところは判然としない。他に多数の

花があるのに、その花の香りだけを感じる。それは最も親しい香りであるだけに、いかなるものであるのかわからない。

空に目を向けると、天の半ばは夏、半ばは秋。むせるばかりの躍動は衰え、透き通る静謐が広がりかけている。光は刺すばかりの眩さを納め、包み込む和やかさに変わりつつある。その光の源である日輪の前に一点の黒雲がぽつんと現れ、花が一段と輝きを増す。

耳にかすかな音が聞こえる。笙の音色か、天の声か、枝のざわめきか。その中に一つ際立つのは沈吟する蝉。震えるその声に促されて、あの一つの花が枝を離れようとする。

そうか、自分はこれで死ぬのか。

孟浩然是目を閉ざす。

五十一歳は老齡とは言えまい。病は二十年來のもの。むしろここまでよく生きた思うべきか。

突然の死なら、人生において手掛けた全てが途中で終わるのは已むを得ま

い。そうであるのが美しいと見えさえもする。二十年前に死を覚悟し、いよいよ迫りつつあるとの自覚がありながら、終わりを整えられずにいるのは見苦しい。いまはまだその時であってほしくない。目を背ける以外に何ができるのか。

細く続く蝉の音が、別の聞き覚えのある声に変わる。

「いつものようにお断りするのでよろしいでしょうか」。

弟だ。扉越しに、先ほどから弟が何か言っていたようだ。とすると、自分はまだ生きているらしい。

「どうかしたのかい」。

自分の声は蝉よりも弱々しい。

「都からのお客様なのです」。

弟は声を強める。

「誰かが来るのかい」。

「いえ、もうすでに御到着です。何のお知らせもなくお越しになったのです」。

それほどのようにするのがよろしいかと、お尋ねしていたのです。

「どなたであろうか」。

「ですから、畢曜（ひつ っよう）様です」。

「畢曜様御自身がお見えなのかい」。

「突然のお越しなのです。兄は、ここ一年ほどは、どなたともお会いしていませんと、申し上げましたところ、それは御承知の上で、王昌齡（おう しょう れい）様からお預かりした詩をお渡ししたいとおっしゃっています。私がお受け取りするのでよろしければそのようにいたしますが」。

「そうなのかい」。

夢からの目覚めは存外悪いものではない。ゆっくりと身を起こす。部屋を見回し、体に痛むところはない。

畢曜か。かつて都で会った。淡い印象しかない。王昌齡は、南園で迎えた最後の客だ。南方に流される途中で襄州に立ち寄ってくれた。近頃、都への帰還を赦されたらしい。

足を床に下ろし、そっと立つ。爽快とまではいかぬが、これなら歩けそう
だ。

「他ならぬ王君のことだ。お会いしよう」。

「よろしいのでしょうか」。

衣を振るう。人生の終わりを整えなければと思ったことも、いまのこの調
子であれば可能かも知れない。

「このなりでは具合が悪い。まるで死にかけの病人だ。誰か寄越してくれな
いかい」。

病み疲れた自分の姿に苦笑し、夢に見た花を想う。

荊州に行き張九齡の幕府に入ったのは二年前の夏。同じころに、王維は張
九齡失脚の影響を受けて都にいられなくなり、涼州の河西節度使のもとに移
った。莫淵が仕えるところだ。

翌年の春に荊州を発つて揚州に向かい、途中で李白に会った。揚州で孟郁に会い、江南で張子容に会った。夏に荊州に戻り、日を置かずして南園に帰った。張九齡のもとで初めて官職を得たのも一年ほどで終わった。

王昌齡の訪問は、帰郷後の秋だった。王昌齡は孟浩然より十歳ほど若く、開元十五年に貢挙に合格した。孟浩然の一回目の上京はその年の暮れで、唐の詩風はその時をもって一変したとされる。孟浩然一人が変えたのではない。王維や李白や王昌齡など、孟浩然を敬愛する若い人々が詩の刷新に努めた。王昌齡の詩は、孟浩然とは対照的に心の昂ぶりをそのままに歌い上げる。日頃の言動もその詩に似て、慎みに欠けるとしばしば批判される。人に憎まれもして、遙か嶺南の地に追いやられた。

僻遠の地に向かう途中の王昌齡は、世を論じ、史を論じ、詩を論じて劇飲した。孟浩然も珍しく激しく飲んだ。王昌齡と孟浩然の思いが響き合った。酒量は孟浩然の体が受け入れられる限界を超え、病勢が一気に悪化した。以来、全ての客を断っていた。

弟に脇を支えられて畢曜が待つ部屋に入る。

客は深々と頭を下げ、突然の訪問を詫び、孟浩然の健康状態を尋ねる。簡潔な言葉にも情愛が滲む。

「まことよい日にお越し下さいました。今日はことのほか気分がよいようです。これを初めとして、また大勢の方々とお会いできるようになりましょう」。孟浩然の返答に、畢曜は笑みを浮かべてうなづく。目にはなお憂慮の色がある。

王昌齡に託された詩を差し出し、この訪問に至った経緯を告げる。畢曜自身を添えて若干の品を置く。

畢曜は、最近まで、皇帝の先祖を祀る太廟を守る任務にあった。その任期が切れても次の勤めがなく、帰郷を兼ねての旅に出た。都に向かいつつあった王昌齡と偶然出会い、襄陽に行くのならばと詩を渡された。

王昌齡の詩は、南園を去る王昌齡に孟浩然が贈った詩に答えるものだった。孟浩然はそのとき自分の病を「沈痼の疾い」と詩に詠み込んでいた。

孟浩然是、不意に、手を動かす。顔の脇に、夢に見た一点の黒雲が現われたと感じ、それを払い除けようとした。

畢曜が訝しげに見る。

黒雲は見る見る広がって行く。

畢曜は腰を浮かし、辞去を申し出る。

孟浩然是弟を呼ぶ。

「わざわざおみ足をお運びいただきなら、すぐにお帰りいただき訳にもまいりませぬ」。

杯の用意を言い付ける。

畢曜は腰を浮かせかけたまま遠慮する。

「長くお引き留めるのではありません。よろしかったら、一つだけお尋ねしたいことがあるのです」。

畢曜は顔を曇らせ、

「私にお答えできるようなことでしょうか」。

孟浩然の耳には、夢で聞いた枝のざわめきも響き始めている。

「気にかかる噂があるのです」。

畢曜は当惑したありさまで、

「私もここしばらくは都の外に出ておりました」。

孟浩然是構わずに、

「都の噂には、襄陽に聞こえるまでの間に、いろいろと尾ひれが付きましたよう。あなた様に差し障りがあるようでしたら、何もおっしゃらなくて結構です。しかし、お聞かせ願えないかと私は切に願っています」。

畢曜は意を決して座り直す。

「単刀直入にお尋ねします。近頃、ある者が『陛下の家の事』と申したとか。

それはまことでありましょうか」。

畢曜は小さく嘆息する。

「都の外にも広がっていましたか」。

「事実でありましたか」。

「その場に居合わせたものではありませんが、私は事実であったと聞いています」。

「申したのはやはりあのお方ですか」。

「いまのお尋ねにはつきりと否定も肯定もできません。『陛下の家の事』とお上に向かって申し上げるお方が、陛下のお近くにはあのお方お一人以外にはないと、あなた様がお考えでありましたら、私もそうであったと聞いています」。

畢曜はそれ以上は答えないと堅く口を閉ざす。

孟浩然は目を閉じてしばし沈思する。

弟が酒と杯を整える。畢曜は断り切れないと見て杯を手にする。孟浩然はわずかに口を湿らせる。

弟に筆を持たせ、一字ずつ筆写させる。一篇の詩になる。

畢曜に渡すと、畢曜はじつと読んで後に、静かに一度朗誦する。

孟浩然は重ねて酒を勧める。畢曜はあくまでも辞退する。

「この弟に、南園に咲く花などを案内させましょう。どうか御覧になって下さい」。

畢曜はその言葉に乗って部屋を出る。

孟浩然是その姿を見送る。人に詩を贈ったのは王昌齡以来で、久しぶりの新しいその詩が畢曜とともに南園を出て行く。畢曜はそれを王昌齡に知らせ、二人から人々の間に広まって行くだろうか。我が近況に関心のある者ならばあの詩を読むだろう。そうでない者はせいぜい一瞥して終わりだろう。新しい詩を作ったと、人々に注目されてしかるべき詩はしばらくくない。

詩は興の訪れとともに生まれ、天下の詩風を変えるのに手を貸したこともあった。一筋の道を誰よりも一歩先へと進みたいと思いつけて来た。七度目の旅はそれを叶えるものにはならなかった。人生の終わりを整えるには次の旅が必要なのか。八度目はならぬと妹に止められた。そうでなくても、この

身体では無理だ。道の途中に止まったまま終わるのか。

夢に見た花は今しも散ろうとしていた。

堅苦しい衣服を脱いで榻に横たわる。すっかり馴染んだ病人としての感触がたちまち戻る。これではならじと急いでまた起き上がる。

たまたま気分がよかったのももう終わりか。さらに立とうとして体の重さに負ける。

漫然と窓からの明かりを眺める。

鹿門山でも峴山でも、山頂とはいわず、せめて山裾のあたりでも歩けたならば、わずかでも前進できようか。鹿門山を歩くと、かつてはいくらでも詩が湧いた。そのときの残りを拾えるのではないか。

弟が静かに入ってくる。

「久しぶりのお客様でしたから、お疲れになったのではありませんか。横に

なられたらいかがでしょうか。

「今日は不思議と気分が良い。しばらくこうしていたい」。

「それなら結構です。これからは気候も良くなり、お体も本復へと向って行くことでしょう」。

「まだしておきたいこともあるからな」。

弟は微笑み、

「先程も、あれだけの詩をお作りになったではありませんか。それこそ本復に向かつておられる確かな証です。その詩を書き留めておきましょう」。

弟は墨を磨る。

その単調な音の響きに、鹿門山や峴山の道を心の内で辿る。あちこちを巡るうちに、またあの大木の下に出る。見上げると、枝のざわめきが高まる。

弟の声が遙か遠くにある。

「何か言ったかい」。

「詩に『氷室』とあるのが気になりました。お部屋は寒いのでしょうか」。

「病のせいかな、感覚が普通ではなくなっているようだ。真夏も暑いと感じなかった」。

「いまはいかがですか」。

「今日はよい。窓から入る風が心地よい」。

そう言いつつ、大木を揺らす風の不気味さを思う。

「病はきつと治ります。今日のこの詩をきっかけに、以前のようにたくさんお作りになることでしょう」。

「病は治ると思わねば、治るものも治らないと、そなたに何度も言われた。本復に向かっていると思うべきだろう。しかし、それでたくさんの詩をまた作れるようになると思うのは、本当のところは、よくない気がする。今日は気分がよく、畢曜様への詩も思いがけずすらすらと浮かんだ。私自身、これなら、まだまだ詩を作れると思った。今日の詩は新味に乏しくとも、これから先、もう少しよい詩もできようと思いましたが、畢曜様をお見送りして、決してそうはならないとわかった。私の詩は終わりだ」。

「何をおっしゃいますか。もっとたくさんさんの詩を作っていたいただきたいと願っているのは、私だけではありません。大勢の人がいます。病に負けたりなさないで下さい」。

「病でなくても、ずっと前からわかっていなければいけなかった。龐徳公が不老長生の術によっていまも鹿門山のどこかにおられるかどうかは知れぬが、太宗皇帝でさえ不老長生術を得ようとしてかえって御寿命を縮められたことを思えば、人は必ず死ぬものである。死ぬからには、これが最後の詩だったというものがある。今日までその自覚がなかった」。

静かに自分の古い詩を唱える。

清曉因興来 清らかな曉に、興がもととなりまして

乘流越江峴 流れに乗って、漢水に臨む峴山の前を越えると

沙禽近初識 沙辺の鳥は、近づいて初めてそれと識れ

浦樹遙莫弁 浦辺の樹は、遠くに見わけられなくなりました。

漸到鹿門山 ようやく鹿門山に到りますと、

山明翠微浅　山は明るく、あたりは浅い靄に包まれています。

「父上にこの詩を教わった。張野人の叔父貴には、二十年、三十年も早くに生まれた詩だと評じていただいた。詩を求める道はこのときに始まった。自分には二十年も三十年も先があるとのみ思って、この詩が最後になる可能性は少しも考えなかった」。

「実際に、兄上はあれからたくさんさんの詩をお作りになったではなりませんか。常にその時に生み出せる最も優れた詩を、兄上は作ってこられました。まだこの先も続きます」。

「もしもそのようであったならば、いま振り返って、我が生涯にこれこそが最も優れた一篇だと言えるものなくてはならぬはずだ。残念ながら、そう言えるものはない」。

「どれも立派です」。

弟は幾篇かの詩を挙げる。

「いつだって道の半ばに私はいて、その先が長く続いていると漫然と思つて

いた。この一篇が最後との自覚があれば、今日の詩も異なるものになっていただろう。道半ばにいますと思つ限り、後の世に伝わる詩はないままだ」。

孟浩然是大木から散ろうとする花を想う。

「兄上の詩が後の世に伝わらないとしたら、一体どのような詩が伝わるのですか」。

「李白君でも王昌齡君でも、若い人々がこれから新しい詩を次々に生み出すだろう。唐の詩として残るのはあの人たちのこれからの詩だ」。

「皆様が立派な詩を作るようになったのは、兄上が一步でも二歩でも前を進んで来られたからではありませんか。兄上自身、そのようなことをおっしゃっていたではありませんか」。

孟浩然是首を振り、

「いまでもそのように思っている。身の程知らずのこの私を笑ってくれ。私は、幸いにも泰平の御代に巡り遭い、気ままに詩を詠んで来た。私の詩が、いくらかでも世の中に知れるようになったのは、たまたま時期がよかったか

らだ。詩はさらなる先を求めている。泰平の世を生きた私の役目はここまでだ。詩はこの先に何を待っているのか。恐らくは、世の乱れだ。そのときに生きる者が、後世に伝えるに値する詩を詠むであろう。

「何をおっしゃっているのか、私にはわかりません」。

「死を前にして、ようやく気付いた。世の中も同じではなからうか。人の死に匹敵する状況になって真の詩が生まれるのではないのか。陶淵明も阮籍も謝靈雲もそうだったとは思わないかい。私は泰平が続くうちに死ぬ。私にはそれが幸いでも、私の詩にとってはそうではない」。

弟は眉を顰め、

「どうか思いを凝らしすぎませんように。久しぶりにお客様にお会いになって、お気持ちはまだ高ぶっておられるのではないでしょうか。少しお休みさされてはいかがですか」。

「今日がいつになく気分がよくて、あの方にお会いできたのはよかった。畢曜様は立派な人だ。あのような人が根や幹となって支えておられるから、唐

という大木が立っていられる。人は、木を見て、花にばかり目を注ぐ。美しく咲く花のようになりたいと思ひもする。私も、唐という時代に咲く一つの花になりたいと思つていたようだ。詩によつて咲く花だ。真の隠者は虚名を求めない。鹿門山のこの似非隠士は、叔父貴も言つていた通り、欲の塊だつた。優れた詩が作れば皇帝と交わることもできよう、孟子の志を継ぐ者として後世に名を残せようと、欲の皮を突つ張つたのだ。花は、花だけでは咲けない。枝がなければ花は咲けない。枝は幹に支えられ、幹が立つのは根があるからだ。もしも根や幹が弱つてしまつて、そこに嵐が来たら、いかなることになるうか。大木といえども倒れずにいられるだろうか。

「嵐が来るのですか」。

「すでに黒雲がある。風が吹き出している。そなたは聞いたであろうか、木は倒れる最後の時に最高の花を咲かせると。木は倒れるべきではない。しかし、詩はそれを求めている」。

「不吉なことをおっしゃらないで下さい。王昌齡様は赦されたではありません

んか。張九齡様もいずれそうなりましょう。

「張九齡様は都には戻れない。『陛下の家の事』と言う者が陛下の最もお近くに
いる限り」。

「そのことですか」。

孟浩然は顔を歪める。背中にいつもの痛みがまた来ている。

「そなたも知るように、『陛下の家の事』と、最も枢要な地位にあるお方が口
にするのはこれで三度目だ」。

痛みを振る。

「見ての通り、私は感情を高ぶらせることのできない身になってしまった。
大風の吹く時代の詩は私には作れない」。

孟浩然は榻に横たわる。弟は兄の背を上から包む。兄は弟の膝に頭を押し
付ける。

そのままじっとこらえていると、ゆっくりと痛みが引く。苦痛とともに噴
き出た汗が氷のように冷える。詩に詠んだ「氷室」である。

弟は兄の汗を拭い、楽な姿勢に直して、布団を掛ける。

「お薬をもつて来ましようか」。

親しみ過ぎた薬の味を思い、

「いまはいい。湯だけでももらえるとありがたい」。

弟が戻って来るまでの間に、「陛下の家の事」を思う。

唐朝においてそれを最初に言ったのは李世勣（りせいせき）だった。唐の三代皇帝は即位六年目にして、皇后を廃して、武氏を新しい皇后に立てたいと考えた。褚遂良ら重臣が揃って反対した。李世勣だけが「これは陛下の家の事。外の者に問う必要はありません」と、皇帝に寄り添う発言をした。皇帝は李世勣の支持を頼りに、武氏を新しい皇后にした。褚遂良は都から追放され、褚先生の難儀が始まった。

二度目に言ったのは、則天武后自身だった。則天武后は皇帝になった後に、誰を後継者にするのか決めかねていた。息子に皇位を継がせるのは順当ではあっても、息子は父皇帝と同じ李姓であるから、息子の代になれば皇統はま

た李姓に戻り、自分が建てた武氏の王朝は一代で終わってしまった。息子ではなく甥の武承嗣か武三思に継がせれば、武姓の王朝が続く。則天武后は迷った末に二人の甥のどちらかにしようかと心を決め、「これは朕の家の事だ。諸君等の預かり知ることではない」と、重臣の口を塞いでしまおうとした。狄仁傑（てき じんけつ）が異を唱えた。「王は四海をもつて家となします。四海の内に陛下の家の事でないものはありません。宰相である私は、陛下の家の事に關わるべき人間であります。どうして預かり知らぬことなどありましようか」。則天武后には、狄仁傑が正しいと認めるだけの度量があり、武承嗣も武三思も皇太子にしなかつた。

三度目が李林甫（りりんぽ）だ。李林甫は、唐の初代皇帝の父親を先祖とする皇族の分派の末裔で、皇族の特権で官界に入り、財政立て直し策で頭角を現した。上に立つ者に取り入るのに巧みで、それ以上に、邪魔になる者をつまずかせる天才で、めきめきと昇階した。宰相の地位を手に入れるべく、第一に玄宗皇帝の信頼を得て、第二に武惠妃（ぶけいひ）を味方に付け、第三に

張九齡を失脚させようとした。武恵妃は則天武后の縁者で、玄宗皇帝の寵愛を独占していた。先に皇太子は趙麗妃（ちよう れいひ）が生んだ李瑛（り えい）と定められていたが、趙麗妃に対する皇帝の愛は冷め切っていた。武恵妃は自分が生んだ李瑁（り ぼう）が皇太子になることを望み、皇帝も李瑁をひととき可愛がっていた。李林甫は宦官と結んで、李瑁が李瑛に代わるような種々の工作を進めた。武恵妃はある日、皇太子李瑛のために自分たち母子は生きられなくなってしまうと皇帝に泣いて訴えた。皇太子が計画している悪たくみを聞かされた皇帝は皇太子を廃そうとした。張九齡は、皇帝を制止した。李林甫はここで、皇帝のお気に入りの宦官に、「これは陛下の家の事。外の者に問う必要はありません」と言わせた。皇帝は張九齡の異見を疎ましく感じ、いよいよ皇太子を廃そうとの考えに傾いた。李林甫はさらに巧妙な仕掛けを考えた。武恵妃はこっそり張九齡を呼び寄せ、どうか自分たち母子を助けてほしいと涙ながらに頼んだ。張九齡には武恵妃の願いを聞く気は全く、その事実を皇帝に告げた。全てが李林甫の計算通りだった。皇帝は、張九齡が武

恵妃を悪く言うのを不快に感じた。李林甫は、張九齡が武恵妃を陥れるためにありもしない告げ口をしていると、皇帝に示唆した。皇帝が武恵妃に問うと、武恵妃は張九齡とは会っていないと全面的に否定した。李林甫はさらに巧みに、全くの別件で張九齡に落ち度があったことを皇帝に告げた。皇帝は怒り、張九齡を宰相から降ろし、ついで都から追い払った。

張九齡が失脚したのには、このような背景があったことを、孟浩然是荊州に行つて張九齡に親しい人々から聞いた。

張九齡が都を去ると、皇太子を守る者がいなくなつた。皇太子は恐るべき陰謀を企てているとして告発された。皇帝は皇太子を廃すべきか重臣に尋ねようとすると、李林甫は「これは陛下の家の事。臣等に問う必要はありません」と言った。それが畢曜に確かめたかつた噂だ。

皇帝は皇太子を廃し、ついで死を命じた。この事件に連座する者は数十人に及んだ。かくして、武恵妃の子の李瑁が皇太子になる道が大きく開けたのだが、その年の内に武恵妃は病死した。皇帝は最愛の女性を失つて落胆し、

先の皇太子を刑死させたことを悔やむようになった。結局のところ、開元二十六年の夏に、新しい皇太子として李璵（りよ）が選ばれた。李林甫は李璿を始めだけは推したものの、年長者を選ぶべきとの意見が強く、李林甫としても武恵妃が死んだからには頑張り通す必要はなかった。

朝廷の動きを思うとまた気持ちが高ぶり、背中の痛みが始まりかける。

弟が戻り、湯を啜ると、少しばかり落ち着く。

「おもねりの言葉が通るのは、お上がそれをお喜びになるからだ。大風が吹き荒れるのは止められない。詩はそれを待っている」。

静かに呟くように言う。

「人は大風など待っていません」。

「その通りだ。だから、私もささやかながら何かしたいと、荊州に行き、揚州に行き、江南に行った。李白君に会い、郁殿に会い、張八君に会った。かつて張八君も私も魏元忠様に続こうと考えていた。あのころよりもいまこそ魏元忠様に続かなければならない。思えば、魏元忠様が闘えたのはあの時代

だったからだ。則天武后様には自分を滅ぼすようになる者も用いる度量があった。いまの陛下はそうではないようだ。張八君と鹿門寺に籠っていたときに、いまの陛下がお立ちになったのを聞いて、長い雨がやつと晴れ上がったと感じたものだ。いまはどうなのか。たとえ嵐が来ても、幹や根がしっかりと保たれているのなら倒れずにすむ。いまはどうなのか。

「あまり不吉なことばかりをおっしゃいませんように」。

俄かに孟浩然是爽快な気分になる。

「嵐か。嵐で大木が倒れて、何がいけないのか。隋が滅んで唐へと時代が変わろうとしたときに、この南園を守ったのは誰だったのか。南園老を初めとする我等の祖先だ。どこかの皇帝がこの南園を守ってくれたのか。嵐によって大木が倒れても、大地が覆るのではない。孟子はこのように言っていたではないか」。

天油然作雲

天が油然と雲をなし

沛然下雨

沛然と雨を下すならば

則苗淳然興之矣 苗は淳然と興らん。

「早によつて草が枯れても、ひとたび天より雨が降るならば、たちまち草は伸び上がる。孟子は、雨を王者の徳を譬え、民衆の力を苗に譬えた。世に理想の政治が行われるのならば、即座に天下は平和になると孟子は言った。一見すれば、雨が苗を伸び上がらせるのだらう。しかし、苗が伸びるのは、大地にそれを興す力があるからだ。天の降らせる雨と、苗を伸び上がらせる大地が感応するから、そのようになる。天と地を感応させるのは、その間に浩然の気が充滿しているからだ。私はかつて魏元忠様のもとにのみ浩然の気が集まっていると思つた。それは間違つていた。浩然の気はどこにでもある。どの苗にも宿る。詩とは浩然の気によつて生まれ出るものだ。私の詩がなお及ばないのは、淳然と興る無数の苗になつていないからだ。阮籍も謝靈雲もそれぞれただ一人の詩であつた。だから、陶淵明の詩の力強さに及ばない。」

孟浩然は立ち上がる。

「私は岷山を見つめること父上に及ばず、土を耕すこと母上に及ばず、南園

を守ることに南園老や無名の先祖に及ばない。それでは虚しい詩名を一時期に流しただけで終わってしまふ」。

再び激しい痛みに襲われる。

「次の詩を」。

興の訪れを待つ孟浩然是そのまま榻に倒れる。

半年後の開元二十七年（七四〇）年春。

死が迫る夜に、南園は激しい風雨に包まれる。

外の音が強まると、生への執着に揺すぶられ、外の音が弱まると、静かな諦観が湧く。外界に心のうねりが呼応する。

仏教を学び、道教を学び、死は目前にしてもわかり得ない。一人の死は南園の営みの終わりを意味しない。孟子以来一千年の間、孟一族は一日一日を弛まず飽かず積み重ねて来た。王朝が幾度交替しようとも、無名の人々によ

つて南園の伝統が受け継がれた。今夜のうちに息子が死んでも、明日も母は畑に出るであろう。

一千年の歳月の中で、自分が生きた五十年ばかりは、穏やかな風光に恵まれた稀な時代であった。その前に嵐があり、この後にも嵐があるのか。稀有の時代に生きる幸いを得て、自分は何をしたのか。

眠るともなく眠り、考えるともなく考え、いつしか風雨はおさまり、しばしの夢を結ぶ。

春という季節においては、夜明けは日に日に早まる。同じ目覚めの時を迎えても、いつか暁に先を越される。四方で鳥が啼き交わして、なお眠りの中にある。

白み始めた空の下に岨山がある。父がいつも通りに山を見ている。その背に、父の心はいつになつたらわかるのだろうかと考える。

不意に簡単な答えを得て、孟浩然是大笑する。

父になればいい。

前に岷山がある。振り返ると自分がいる。

「君には、私の心がわからないのかい」。

孟浩然は自分に言ってまた大笑する。

悠然と岷山を見る。

群鳥が山を飛び立ち、大地には、昨夜の風雨で散った無数の花がある。淡い霧が立ち昇る。

「浩然の気だ」。

そう呟くと、そこを駆け行く者がいる。孟大だ。

「待つて」。

その背を追う。いきなり岩壁に突き当たる。

「ほら、龐徳公の香りがしておりますな」。

張野人が岩を叩く。

「何だ、来ていたのですか」。

岩を登る。

そこに父がいる。父の後ろに立ち、その背を見て、父の心はいつになつたらわかるのだろうかと思う。

不意に、心に訪れるものがある。

何だ、これだったのか。孟浩然是笑う。

背中を叩かれる。

「ほれ、ほれ」。

振り返ると母がいる。

促されるままに畑に行く。どこもかしこも濡れた花卉が敷き詰められている。そこから淡い霧が湧き立つ。

「これは浩然の気なのでしよう」。

問うと、孟大が答える。

「そう思うのだったら、真直ぐに駆けてみな」。

走る。

虚空に一本の道が通じると見えて、いきなり岩壁に突き当たる。

「ほら、龐徳公の香りがしておりますな」。

張野人が岩を叩く。

「何だ、来ていたのですか」。

岩を登ると、父が立っている。父の背を見て、父の心はいつになったらわかるのだろうかと思う。

父になったら、父の楽しみは知れない。いつか誰かがそのようなことを言っていた。

「いまごろわかったのか」。

父が笑う。

父だけではない。その前に無数の人々がいて、同じように笑っている。

不意に、心に訪れるものがある。

何だ、これだったのか。

よし、わかったと、言葉に出そうとする。

「考えたらいけません。いつもの悪い癖です」。

楊義姉が言う。

「でも、ほら、もう消えてしまします」。

手を差し出して掴もうとする。

確かな感触がある。

「これだ」。

あまりにはつきりとしているので、これは夢に違いないと思う。夢が覚めたら消えてしまう。だから、その前に見なければいけない。

手を顔の前に持って来て、はつきりと目を見開く。

脇に弟が座している。

「お目覚めですか」。

やはり夢だった。あれは消えてしまったのか。

孟浩然は手を弟の前に差し出し、

「ここにあるものを読んでくれないかい」。

弟は覗き、

「何があるのでしょうか。」

「詩があるだろう。」

「夢の中で詩をお詠みになったのですか。」

孟浩然は手を顔に近づける。何も無い。

「夜は明けたのかい。」

「随分と経ちます。」

「そうか、それで消えてしまったのか。」

孟浩然は目を閉じる。

「どのような詩だったのですか。」

「千年に一つの詩だった。その詩はもともと私ではない。だから、消えてしまったのだろう。ほら、何も書かれていないのだろう。」

孟浩然はもう一度手を差し出す。

弟はじつと見つめ、

「いえ、いまはあります。くつきりと黒く書いてあります。よくご覧になっ

て下さい」。

「そうなのかい」。

弟は兄の手を取って、顔の前へと動かす。

孟浩然には何も見えない。

「それではいけません」。

「どうすればいいのかい」。

「こうするのです」。

弟に抱えられて野の内に立つ。

一本の大木があり、前に岨山がある。

「ほら、日に手をかざして見て下さい」。

手を挙げると、掌を透かして二十の文字が読める。

春眠不覚曉　春の眠りは暁を覚えません

処処聞啼鳥　ところどころで鳥が啼くのが聞えます。

夜来風雨声　夜中はずっと雨や風の音がありましたから

花落知多少　どれだけ花が落ちたことでしょう。

「何だ。この詩か。これだったら昔から知っている」。

「だから、いまごろわかったのかと、言ったではないか」。

父の声だ。

それに応じて、背中を叩かれる。

「ほら、ほら」

母の声に、

「いけない。また消えてしまう」。

孟浩然は、いまの詩を記憶に刻もうと、掌を透かし見ると、妹がいる。

「お目覚めですか。朝のお薬をお持ちしました」。

榻に横たわっている。

「夢だったのかい」。

慌ててまた手を見ると文字はない。

「どうなさったのですか」。

「おまえもよく知っているだろう、我が一族に昔から伝わる春の詩があっただろう」。

「春の詩ですか」。

「ほら、おまえも好きだって言っていた詩だ。南園にかつていた無名の先祖が遺してくれた詩だ。とにかく懐かしい詩だ」。

「そう言うお兄様は思い出せないのですか」。

妹は笑う。

「おまえはわかっているのかい」。

「お姉様のこの詩なら知っています」。

妹は詩を唱える。

「それは姉さんの詩だったのかい。姉さんのときにも、その詩のような春が南園にあったのだろうか」。

「一番いいときでしたもの」。

「この先にもあると思うかい」。

「南園の将来を心配なさっているのですか。郊君もいれば二十二郎さんもいるではありませんか」。

「南園には何の心配もいらないのかい。だったら、私は旅に出てもいいかい」。

「またなのですか」。

「無数の花が散っているところだ。そこで花を拾ってみようと思う」。

「お兄様はお忘れになったのですか。八度目は決して許しませんと、あたしは申したはずですよ」。

「思い付いたら行ってみるしかないのだ。ほら、見てご覧、あそこに張野人の叔父貴が舟を用意して待ってくれている。だから、行くぞ」。

それから十九年経った乾元二（七五九）年の春、杜甫は秦州にあつて、孟浩然を回顧する詩を詠んだ。杜甫は孟浩然より二十三歳若く、生前に直接の交流はなかった。

吾憐孟浩然

憐れに思いますのは、孟浩然が、

短褐即長夜

粗末な農民の衣服のまままで長い眠りについたことです。

賦詩何必多

賦した詩は必ずしも多くはありませんでしたが

往往凌鮑謝

往々にして鮑照や謝靈雲を凌ぐものでした。

清江空旧魚

清らかな川にはいまも孟浩然の馴染みの魚が空しく泳ぎ

春雨余甘蔗

春の雨に孟浩然が植えた甘蔗が残されています。

每望東南雲

ここから東南の雲を望むたびに孟浩然を想って、

令人幾悲咤

幾たびとなく私は悲しむのです

同じ時期に、杜甫は夢に李白を見て、夢の中に李白が入って来たのは、生死の境を分けてしまったからではないかと訝しみ悲しんだ。

李白はその二年前に獄に繋がれ、死刑になるところを友人の嘆願によって救われ、遠く南方の夜郎に流された。李白は夜郎に向かう途中で赦免にあつたのだが、杜甫はそれを知らずに、流刑地で没したのであるまいかと疑った。

十九年の間に世の中は激変した。

孟浩然が死んだ開元二十八年（七四〇）年の同じ春に、張九齡は荊州で没した。

天宝三（七四四）年、玄宗皇帝は楊貴妃を宮中に召した。政事の全てを李林甫に任せ、皇帝は楊貴妃との愛に溺れた。李林甫は、楊貴妃の親者の楊釗（よししょう）を抜擢し、己の地位をさらに強固にした。楊釗は皇帝より国忠の名を賜り、李林甫の死後、楊国忠は国家の大権を掌握した。楊国忠はもと博徒で、国家経営の才略はなく、天宝十四（七五五）年一月、安祿山（あんろくざん）は、国を乱した楊国忠を除くのを名目として反乱を起こした。

安祿山は十二月には早くも洛陽を陥落させ、翌年六月に長安に迫った。玄宗皇帝は西方に逃げ、都落ちの途中で息子が別の道を取って靈武で即位して新皇帝になった。肅宗（しゅくそう）皇帝である。その一方で、玄宗皇帝の第十六子である永王が江南の地で挙兵した。そこに参謀として李白が加わった。永王は唐朝の復興を目指したのだが、肅宗は弟の動きを喜ばず、討伐軍を差し向けて永王を殺した。李白は反逆罪で囚われの身となった。

王昌齡は安祿山の乱に遭遇して帰郷した。王昌齡は素行を慎まず人の恨みを買うことが多かった。故郷に着くと、その地の長官によって殺された。

杜甫は、肅宗が開いた新しい朝廷に馳せ参じようとして家を発ち、途中で賊軍に掴まり、長安に連行された。長安では、張説の息子の張均が安祿山から中書令という非常に高い位を授けられていた。張均は、父と同じく宰相になりたいと願っていたのだが、玄宗皇帝が叶えてくれなかったのを恨み、都に残って安祿山軍の入城を歓呼をもって迎えた。王維も長安にいた。王維は玄宗皇帝に同行し損ね、賊軍に掴まって監禁され、脅迫に屈して心ならずも安祿山の命令に従った。杜甫は賊軍の監視の目をかすめて長安を脱出し、肅宗の朝廷に走り着いた。その功によって官職を初めて得た。

至徳二（七五七）年九月、官軍は長安の回復に成功し、肅宗は十月に都に帰還した。王維は、弟が自分の官位を削るのと引き換えに兄の罪を赦してほしいと懸命に願ったのと、賊に監禁されていた間に皇帝を想って詠んだ詩があったことから、降職という軽い処分ですんだ。それでも王維は賊に従ったの

を恥とし、その後は仏の教えのうちに沈潜した。張均は自ら進んで安祿山に従ったことから死罪は免れ難かったのだが、父の張説の功績の大であったことから特に流罪とされた。

杜甫は肅宗から授けられた職務を忠実に果たそうと努めた。それは皇帝を諫める役目で、生真面目に努めれば努めるほど皇帝から疎まれるようになった。乾元二（七五九）年七月、自ら官職を棄てて都を出た。家族を連れて西方の地をさまよい、秦州においてはその日の食べ物に困窮した。その中で、孟浩然を思い李白を思い詩に歌った。

王維は上元二（七六二）年に、李白は宝応元（七六二）年に死んだ。

大暦二（七六八）年、杜甫は岳陽楼に登った。反乱の余燼はなおもくすぶり続けていた。

昔聞洞庭水

昔から洞庭湖の存在を聞いていました私は

今上岳陽楼

今しも岳陽楼を登ります。

吳楚東南坼

吳と楚の大地が東南に裂けて、

乾坤日夜浮　この湖の中で、天と地が昼も夜も浮動しています。

親朋無一字　親戚朋友からは一字の消息もなく

老病有孤舟　老いて病んだ身には一艘の舟があるだけです。

戎馬関山北　山の彼方の北の地ではなお戦があり

憑軒涕泗流　欄干に倚って涙を流すのです。

孟浩然が岳陽楼で洞庭湖を詠んでから五十一年、初めてそれを超える詩が杜甫によって詠まれた。

南園は、孟浩然の死をもって、再び千年の歴史に没した。

王維は、孟浩然が死んだ年に公用で南方に旅し、襄陽を通過した際に、漢水の中洲である蔡洲のほとりに舟を留めて、孟浩然を悼む詩を詠んだ。

故人不可見　旧友はもはや見ることができないのに

漢水日東流　漢水は日に日に東へと流れています。

借問襄陽老　襄陽の老人たちにお尋ねしても

江山空蔡洲　ここ蔡洲からは川や山が空しくあるばかりです。

■送昌齡王君之嶺南

開元二十六（七三八）年の秋、嶺南に流され行く王昌齡を南園で見送つ

た詩。

洞庭去遠近

君はこれから洞庭の遠景、近景の中を行くのでしようが

楓葉早經秋

ここでは早くもこの秋に楓葉が散っています。

峴首羊公愛

ここの峴山は羊祜の愛したところですが

長沙賈誼愁

君が行く長沙はむかし賈誼が愁いに沈んだところです。

土毛無縞紵

あちらでは土地の産物に君に親しいものはなく

鄉味有查頭

こちらでは川で故郷の味の魚がとれます。

已抱沈痼疾

私は治り難い病を抱え

更貽魑魅憂

君は魑魅の棲む地に憂うのでしょうか。

數年同筆硯

數年来、君とは詩文を同じくする友であり

茲夕間衾褥

この夕べに床を並べるのであります。

意気今何在

我等の意気は今にどこにあるのでしょうか。

相思望斗牛

別れて後は君を思つて南方の星を望むのです。

■ 家園臥疾畢太祝曜見尋

開元二十七年（七三五）年の夏の終わりに南園を訪ねて来た畢曜に贈った詩。

伏枕旧游曠

枕に伏しているとかつての旅路はむなしく遙かにあり

笙篳芳夢思

どこかから響く笙の音に誘われて夢にそこを辿ります。

平生重交結

平生より友人との交わりを大切にしておりますが

迨此令人疑

あなた様の御来訪を忝く思います。

冰室無暖氣

私の病室は氷の部屋のように寒いのに

炎雲空赫曦

空には赤く燃えるような雲があります。

隙駒不暫駐

人生はわずかな隙間を馬が駆け抜けるようなものだとい

日聴涼蟬悲
壯凶哀未立
班白恨吾衰
夫子自南楚
緬懷高汝期

顧予衡茅下
兼致稟物資
脫分趨庭礼
殷勤伐木詩
脱君車前鞅
設我園中葵
斗酒須寒興

います

日に日に衰える蟬の悲しい声を聴くばかりです。

壯凶は哀しくも未だに立たないうちに

白髪となつて我が衰えを恨むのです。

あなたさまは南の楚の地より来られ

嵩山や汝水のあたりを旅されたと聞いて懐かしく思います。

この粗末な家私をお訪ねくださり

贈り物までもくださいました

あなた様は家郷を離れて旅をされ

友人を訪ねては詩を贈っておられます。

車馬を曲げてお立ち寄りください

園中の蔬菜を設けて

酒を挙げて興を添えるところでしょう

明朝難重持

明日の朝にこの喜びを重ねられるとは限りませんから。